様式２

７－３	主題	ご利用者に負担のかからない移乗介助の実践について

ケアの質の向上	副題	腰痛ゼロを目指して
人材育成		
研究期間　１７ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム　ゆたか苑

発表者：申　性卓（しんそんたく）機能訓練指導員	アドバイザー：西澤　徳子（にしざわのりこ）ＰＴ
共同研究者：氏名　山田　卓磨、詫摩　理絵子、長嶋　裕子	

電　話	０３－３９５９－２１２９	メール	yutaka-c@douen.jp
ＦＡＸ	０３－３９５９－２１４９	ＵＲＬ	http://members.tripod.co.jp/yutakaen

今回発表の事業所やサービスの紹介	豊島区にある当苑は、社会福祉法人立で平成８年４月、隣接する長崎公園とともに開設されました。５０床の特養で現在４床のショートステイを併設しています。 その他、居宅介護支援事業では、２名のケアマネージャーが地域で元気に活躍しています。

《研究前の状況と課題》

１、平均要介護度の上昇に伴い、ご利用者や介助者の移乗の負担が大きくなりつつあります。身体を支える、抱きかかえるなどの移乗介助が日常的におこなわれています。痣や傷などの発生の原因にもなっているのが現状でした。

２、介護現場で元気に活躍されていたはずの介護職員（勤続年数１年以上の職員）が、腰痛などの体調不良を原因に退職したケースが、Ｈ１９年～Ｈ２２年の間だけでも４名に上っています。

３、Ｈ２１年～２２年度にかけて行われた介護職を対象にした腰痛検診では、多くの職員が腰痛があると答えていました。「腰痛の疑いがある」を含めると、約９割の介護職員に腰痛があることが分かりました。

以上のような現状があり、ご利用者の安全かつ、残存機能に合った移乗を含めた介助方法の見直しが課題となりました。

《研究の目標と期待する成果》

介護現場では「離職者０」、心身ともに健康で働ける職場環境をつくる為に、職員の腰痛予防を促進して、ご利用者にも優しく・職員にも優しい、負担のかからない移乗介助を実践する事を目的とした移乗委員会を設けました。

《具体的な取り組みの内容》

平成２２年

４月：移乗委員会立ち上げる。

５月：ご利用者や介助者の移乗の負担を把握する為に全職員に、アンケート調査を実施。

※無断転載・複製を禁じます

６月：移乗のための福祉用具を理解するために、外部講師に講義を依頼。疑似体験を通じてリフト使用の安全性と快適性を実感。リフト導入のための使用操作方法についてのマニュアルを作成し全職員に配布。

７、８月：ご利用者Ｋ氏のリフト移乗の試行・実践レクチャーを行い、リフト移乗へと転換をする。

１０月：ＰＴよりリハビリ専門職の視点から「従来の抱きかかえる移乗介助のリスクについて」の施設内研修を行う。

１１月～平成２３年３月：すべてのご利用者対象に移乗方法の見直しをおこなう。

・介助される側に立った、お１人１人に合った移乗方法の決定を行う為、個別の評価基準を設けリハビリ・フェイスシートを作成。

・ご利用者５０名中３３人が福祉機器使用（トランスボード及びリフト）の対象者となり、重度の方から１名ずつ実用的なレクチャーを開始。その中でリフトに関しては「時間がないから出来ない、なぜ福祉用具を導入するのか分からない」との意見が多数あり、業務の見直しが必要となる。

・居室移動・吊り具の選定・説明を随時行った。

４月～：ご利用者のご家族の方に移乗用具について説明を行い、理解を得る。

・移乗方法の転換は本人・ご家族の同意を得る。

・従来の移乗介助の概念の変化を個別評価のもと取り組んでいる。

購入物品

床走行式リフト	法人内の施設より取り入れる。
吊具	￥３８，０００
トランスボード	￥１８，０００
フレックスボード	￥３５，５００

《取り組みの結果と評価》

・パーキンソン氏病のＫ氏は、従来の抱きかかえる移乗後には、持病による振戦が見られていたが、リフト使用を継続してからは症状がほとんどみられず、移乗時に防げなかった痣や傷をなくすことができ安心で安楽な移乗介助が実践出来た。

・平成２３年度４月から現在まで、腰痛などで退職している職員は０ではある。腰痛の原因は移乗だけではない。しかし、移乗時の福祉用具の使用を進めた効果は明らかである。

・重度の腰痛を抱えていた介護職員からも、移乗用具を使用する事で身体的にとても楽になり、医療機関に通院することが殆どなくなったとの声も聞かれている。

《まとめ》

介助する側の都合による移乗ではなく、介助を受ける側の意思を尊重した移乗介助を行った。その結果

・ご利用者の身体的、精神的な負担軽減。

・腰痛の改善効果に繋がった。

・介護職の専門性を高める事でチームケアの大切さの理解を深める事ができた。

《提案と発信》	移乗用具の導入には、時間と手間といった弊害があると考えがちになります。しかし、強い意志とほんの少しの工夫で導入が可能となります。最終的には職員１人１人に用具の重要性、役割などを気付かせる努力をしなくてはなりません。今回の研究は法人内の他の施設にも「負担のかからない移乗介助」として広く採用されています。そして用具の導入＝負担のない介助＝力で行う介助がなくなりご利用者に優しい介助が実践できる。その事をゆたか苑から発信します。

【メモ欄】

※無断転載・複製を禁じます